

嘉庫 嘉悦大学学術リポジトリ Kaetsu

University Academic Repository

中退防止とサバイバルガイド

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2025-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宇田川, 拓雄 メールアドレス: 所属:
URL	https://kaetsu.repo.nii.ac.jp/records/2000077

研究ノート

中退防止とサバイバルガイド

Dropout Prevention and Survival Guide

宇田川 拓 雄*

Takuo UTAGAWA

<要約>

近年の少子化の影響を受けて私立大学では以前にも増して中退対策が重要な課題となっている。2023年の調査では定員充足率が100%に満たない大学は調査対象600校のうち320校で半数を超えている（日本私立大学振興・共済財団、2023）。学生数を減らさないための中退防止が求められている。これまで様々な中退防止策が実施されてきたが目立った改善は見られない。中退は本人だけでなくその家族、大学、社会にもネガティブな影響をもたらす。本研究では中退の引きがねとなる授業科目の不合格の要因の一つである学生の「自己管理能力不足」に注目した。それは先行研究における「スチューデント・スキルの不足」や「修学意欲の低下」と同種のものと考えられる。自己管理能力、スチューデント・スキル、修学意欲などは大学の授業で教えるものではなく大学入学前に学生が身につけておくべき事柄である。そこで、大学進学に利用されている「大学ガイド」や日本ではみかけないが米国では何種類も出版されている「大学サバイバルガイド」が自己管理能力やスチューデント・スキルをどのように扱っているかを調べ、サバイバルガイドが中退対策に役立つ可能性を指摘した。

<キーワード>

中退、サバイバルガイド、自己管理能力、スチューデント・スキル、大学ガイド

1 はじめに

学生の中途退学（以下、中退）は本人のみならず大学にとっても大きな問題である。本稿では中退の要因と学生の態度の關係に着目した。学生に大学生活を生き抜くスキルを教えて態度の改善に寄与するサバイバルガイドについて考察する。

* 嘉悦大学付属経営経済研究所 客員教授

2 中退と科目不合格

『大学の実力2019』（読売新聞社、2019）によれば2018年度の中退率は、国立大学3.1%、公立大学3.6%、私立大学10.2%である。本稿では主に私立大学の中退を取り上げる。

中退防止対策を考えるにあたって、中退に至る要因の一つと考えられる科目不合格の事例研究（宇田川、2021）を見てみよう。ある非難関私立大学の社会科学系学部1年生が対象の科目の授業で、後期開設の選択必修の基礎科目の例である。受講生83名のうち外国人留学生9名を除いた75名について合否状況の分析結果の報告である。

授業は毎回、教科書を使い、資料を配布し、基本的な形式と記載項目を指示して勉学に使えるようなノート作成を義務づけた。中間試験としてノートを提出させ主要な事項が記載されているかどうかについて50点満点で採点した。期末試験は筆記試験を実施し、教科書、ノート、資料の持ち込みを認めることを繰り返し説明した。中間試験時に30名（40%）がノートを提出しなかった。ノート提出時の授業中に調べたところ20名（27%）が教科書を持参していなかった。期末試験には29名（39%）が欠席した。最終合格者は40名（53%）、試験を受けて不合格だったものは6名（8%）だった。この授業科目は毎回授業に参加し、講義を聞き、指示通りにノートを取り、プリントの設問に回答するという学習をしていれば、ほぼ誰でも最終試験に合格できるように設計されていた。この授業での不合格は学生の学力不足ではなく受講態度が不適切であることが主たる原因と考えられる。

授業では毎回、授業に遅刻、欠席、中抜けをする、ノート、教科書、筆記用具などを持参しないと行った行動をとる学生が20～40%ほどいた。大学に進学し受講科目を決めた際には授業に出席しノートや教科書を使って講義を受けるつもりだったのだろうが、実際にはそれができない学生がいる。そのような学生は自分の生活をコントロールする自己管理能力が不足していると考えられる。

自己管理能力がないと毎日の生活が乱れ、不規則で不健康な生活になりやすい。中期的、長期的な目的を決め、その達成のための計画を立てて効率的に実行することもできなくなる。そのような状況では勉学への意欲もわかないだろう。自己管理能力の不足は科目の単位取得の失敗（不合格）をもたらし、それが重なると中退に至るだろう。自己管理能力は個人の内面の問題であるから学問教育を目的とする通常の大学の授業で強化することはできない。

3 スチューデント・スキル

学生の自己管理能力はスチューデント・スキルの一部である。杉谷祐美子（2008）は初年次教育において勉学の基礎となるスタディ・スキルだけでなくスチューデント・スキルを指導することの重要性を指摘している。スチューデント・スキルとは「学生生活における時間管理や学習習慣を実践する」、「学生が守るべき受講態度や礼儀・マナーを実践できる」、「チームワークを通じての協調性を発揮する」などの学生生活を送る上で必要な自己管理のスキル（技術）をいう。杉谷はスチューデント・スキルに関する指導について「学習面だ

けでなく、学生の目的意識、意欲、生活習慣の欠如はますます深刻化し、各大学は対応を迫られている」と述べ、学生のスチューデント・スキル不足を指摘している。

学習意欲を持っている、遅刻しない、計画を立てて実行できる、授業にテキストを忘れない、欠席しない、などの学生は自己管理ができており大学生として持っているべき十分なスチューデント・スキルを持っている。そのような学生は、中退のリスクが低い。

低偏差値の非難関大学では高偏差値の難関大学に比べて授業を欠席する、途中で退席する、テキストや配布した資料や学習用具を持参しない、私語をする、居眠りするなど、受講にふさわしくない問題行動をする学生が多い。そのような学生は大学で学ぶ準備ができていない学生という意味で「準備不足学生」(unprepared student)と呼ばれている。彼らの中退リスクは高いので「ハイリスク学生」とも呼ばれる。

大学は学問や高度な専門的知識・技術を学ぶ場所と考えられている。学問を教える授業の中で欠席しない方法、生活の計画を立てる方法、計画を効率的に実施する方法、友人と一緒に期末試験の勉強をする方法、といったスチューデント・スキルを教えるのは難しい。

一ノ瀬大一(2021)は山本繁(2022)の「中退の3つのタイプ」を用いて、中退理由の実証研究をおこなっている。3つのタイプとは①1年生前期から低単位取得状況で中退に至る「初期型」中退、②1年生後期から低単位取得状況で中退に至る「失速型」中退、③順調に単位取得しているにもかかわらず家計の急激な悪化、妊娠・結婚、友人関係の悪化などの理由により中退に至る「突発型」中退である。

突発型以外のタイプの中退理由の6割以上は「就学意欲の低下」、もしくは「成績不振」であった。「就学意欲の低下」は杉谷の「学生の目的意識、意欲、生活習慣の欠如」、宇田川の「自己管理能力不足」に相当すると思われる。

大学は入学希望者に対して選抜試験を行い、大学が認める水準に達した者を合格させる。入学者は大学教育を受けるのに十分な学力を持っているはずである。しかし、今の日本の入試の仕組みでは入学定員を満たすことが優先されるため、学力が不足している学生も入学させる傾向がある。そのような学生は一定の学力を要する科目の合格に苦勞するはずである。だが非難関大学の1年生対象の入門的基礎的科目の場合、学力が多少低くても、授業に真面目に出席して教員の指導に従って学習すれば合格できるように設計してある。数学や外国語など基礎学力が必要な科目については補習授業や習熟度別授業をおこなっている。

大学による学力不足学生への配慮があってもスチューデント・スキルが十分でない学生は不合格になる可能性がある。スチューデント・スキルは大学教育を受けるのに必須の能力であり、大学入学前に個々の学生が身につけておくべき事柄である。

準備不足学生は自分が大学生になる準備ができていると誤解しているのだろう。この誤解は学生が、大学とはどんなところであって、無事に卒業するにはどんなスキルを身につけていなければならないかという情報を正確に把握していないために生じているのではないだろうか。

4 大学ガイド

第2次大戦後、世界的に大学の大衆化が進んだ。大学の数も学生定員も増え、大学への門戸が開かれた。それまではエリート層の教育機関であった大学が大衆化した。高等教育を受けてこなかった中間層は大学に関する知識がないため、大学選択、入試対策、学費などを教える案内書である大学ガイドが出版されるようになった。

日本では1963年に18歳人口の高等教育機関への進学率が15%を超え大衆化が始まった。(学校基本調査、2023)。大衆化による大学進学は経済的に余裕があり文化資本へのアクセスが容易な上位中間層から始まった。エリート層と上位中間層出身の学生たちは医師、弁護士、高級官僚、企業の役員やCA、放送局の女子アナウンサーなどの人気の職業、あるいは収入、待遇が良く、社会的知名度が高い、いわゆるエリート職またはサブエリート職を目指した。彼らを読者とするガイドブックである『大学ランキング』(朝日新聞社)が1994年に創刊された。この年の大学進学率は30%であった。大学進学率と所得分布(厚生労働省、2009)を合わせて検討すると、この頃は中間層の上位3分の1が大学進学していたと見られる。

大学進学率は上昇し続け、2009年に50%を超えた。2000年代には富裕層と中間層の全体が大学進学を目指すようになる。『大学の實力』(読売新聞社、2009～2019)は中間層出身の大卒の中堅ワーカーを目指す若者が必要とする大学進学情報のニーズに合っていたと思われる。エリート大学だから進学するのではなく、自分の学びたい科目が学べる大学か、自分が将来したいことが可能になる大学かを考えて選ぶ方法が解説されている。『大学の實力』誌は、学力による難易度、つまり偏差値の水準ではなく、大学が提供する教育の種類や質で大学を選ぶことを勧めている。

この二誌以外にも大学ガイド『大学図鑑』(ダイヤモンド社)、『時間と学費を無駄にしない大学選び』(中央公論出版社)、あるいはターゲットを女子に特化した『女子高生のための大学進学バイブル』(日経BP社)などがある。さらに新聞社や週刊誌が定期的に大学案内や大学ランキングの特集を組んでいる。しかしそれらにスチューデント・スキルまたはそれに類するスキルに関する言及はない。『大学の實力』(2018)が例外的に第3章「学ぶ習慣をつける」で「大学のやる気アップ作戦」、「自ら学ぶ習慣への取り組みに注目を」という見出しで類似項目を扱っている。

大学ガイドが出版されているのは日本だけではない。大学ガイドが中退防止に役立っているかどうか、高等教育の先進国である米国の大学ガイドについて検討してみよう。

5 米国の大学ガイド

2019年時点で米国には4年制大学が3972校あった。米国でも学生が自分に適した大学を選ぶのは簡単ではない。大学によっては人種、民族、宗教、政治的信条、性的志向などによる格差や差別が存在するため、日本よりも大学選択の難易度は高くなる。米国の主要な3つの大学ガイドの特徴を紹介する。

5.1 『フィスク大学ガイド』(Fiske 2019)

1982年創刊の『フィスク大学ガイド』は毎年発行されている。2019年版は343大学が掲載された824ページの大冊である。オンラインで学生に質問を送り、回答をもとにレビュアーが大学紹介記事を書いている。フィスク誌は学生が自分に最適の大学を選ぶには自分自身を知ることが重要だと考え、自分の長所、弱点、好き嫌いを確認するための30項目からなるチェックリストを用意している。

学生は各項目について「全く当てはまらない」から「全く当てはまる」まで10段階で答える。自分の回答と質問リストの後に掲載されている質問の意味の解説から自分の資質や好みを確認し、大学ごとの説明を読んで大学を選択する仕組みである。

項目は3つのカテゴリー、大学の規模 (size)、大学の場所 (location)、学術面と課外活動 (Academics and Extracurriculars) に分かれている。いくつかの項目を見てみよう。

大学の規模に関しては、「何を勉強するか決まっていない」、「大学では匿名状態でいたい」、「私はたくさんの課外活動をしたい」に高得点の場合は学生数が多く、課外活動や授業科目の数が多い大規模大学が向いている。「グループの中で目立ちたい」、「教師から注目されたい」、「自分は授業中に発言し質問することでよりよく勉強できる」に高得点の場合は少人数のクラスが多い小規模大学が良い。

学術面と課外活動については「男子友愛会 (男子はフラタニティ: fraternity、女子はソロリティ: sorority) のメンバーと一緒にいるのを好む」は政治的に保守的で裕福な学生が多い大学が向いている。「成績優秀で優れた才能をもった学生と仲よくなりたい」学生は難関著名大学を選ぶだろうが、自分自身の成績も良くなければならない。「授業のクラスの中で成績上位に入りたい」場合は、小規模で質の高い教育をしている大学が勧められている。

学生が、自分がどんな人間かを客観的に分析し、その結果にもとづいてアドバイスを参照して進路を検討する構成のガイドは日本にはない。中退の状況や中退防止対策については言及がない。

5.2 『ベストカレッジ 384』(Franek, R. et al. 2019)

1992年創刊で毎年発行されている。384大学が掲載されているが毎年掲載数は異なる。874ページの大冊で広告が24ページある。3万人以上の学生調査を実施し集計結果を大学ごとに集計要約し「学生の意見」として掲載している。学生の意見は「学術的レベル」(Academics)、「学生生活」(Life)、「学生の資質や特徴」(Student Body) という3つの項目ごとに要約されている。

大学の客観的情報については本誌のレビュアーが執筆している。

ボストン・カレッジ (Boston College) についての学生の意見の例を示す (抄訳、【】内は筆者注)。ボストンカレッジは東海岸ボストン市にある学部生9千人のカトリック系の私立大学、略称はBC。

「プレッピーの大学だ」【プレッピー：名門私立大学に通う良家の子弟】、「白人の大学だ」【白人学生が62%、アフリカ系は4%しかいない】、「大学のニックネームがジェイ・クルー大学だ」という評判は必ずしも間違いとは言えない」【ジェイ・クルー（J. Crew）は米国の上位中間層向けのファッション・ブランドの名前】、「BCはパジャマで授業に出るような大学ではない」、「学生、特に女子はとてもおしゃれで洗練された服装をしている」、「自分の友人たちは本当に大きな野心を持ち、熱心に勉強する」【大きな野心とは将来、政治家、企業の社長、俳優、小説家、TVキャスター、著名スポーツ選手など各界のエリートになること】、「学生たちは学業に熱心だが同時に楽しく過ごすことにも入れ込んでおり良く学び良く遊ぶというメンタリティーを持っている」、「キャンパスの内外では適度に酒を飲んでいるが何があろうとも勉学が絶対に一番のプライオリティーだ」。

学生たちの個人的私的意見だが東海岸の名門大学の雰囲気は十分に感じられる。学業成績が良く、裕福で上昇思考の強い学生が集まっている大学で学生たちはどのように過ごしているのかがよく分かる。中退の話題は見当たらない。

5.3 『学生のための大学ガイド～米国のトップ100大学ガイドの決定版』（Goldman, J. et al. 2019）

100大学が掲載され 625ページある。本誌は2000年に現役大学生2名がオンラインで全国の3万人以上の大学生に在籍大学の実際の様子についての投稿を呼びかけ、それを集計してウェブ公開を始めた大学ガイドである。2005年からペンギン・ブックス社から書籍の形で毎年出版されていたが2008年に著者らの大学卒業と共に終刊となった。

このガイドの特徴は8つの質問への学生の回答をそのまま掲載していることである。質問は次のとおりである。

- ・当校の評判を書いて下さい。
- ・その評判は正確ですか。
- ・入学希望学生が大学訪問で分からないのは大学のどんなところですか。
- ・大学の様子【制度、慣習、ルール、伝統など】。
- ・教育内容や授業の難易度。
- ・学生の気質など【政治的傾向、楽天的、ガリ勉タイプなど】。
- ・学内外のイベントや課外活動の実態【スポーツ大会、休暇中の催しなど】。
- ・学生同士の交流やつき合い【友愛会の有無、学内外のパーティー、学内コミュニティの種類とタイプなど】。

カリフォルニア大学バークリー校（以下、UCB）の例を見てみよう。

- ①2年生のボブ（カリフォルニア州出身男子）の意見：「【大学の評判について】極端にリベラルで極端に政治的で全国で最高の研究大学とされている。【10校ある】カリフォルニア大学の中で最高の大学で、世界一の公立大学といわれている。UCBの学生はヒッピー

だと言われているが、もうそんなにヒッピーはいない。UCBは急進的で政治的な活動の中心として知られているが、今はずっとおとなしくなっている」

- ②3年生ロリー（女子）の意見：「UCBはアメリカの巨大キャンパスの大学の中でファーストフード・レストランだらけでない数少ないキャンパスの一つだ。手ごろな値段の健康な食事を出すレストランがたくさんある」。
- ③4年生フランク（男子）の意見：「理学部のローレンスホールの屋上から美しいキャンパスと光り輝く太平洋が見える。UCBの喧騒から逃れて頭をすっきりさせるには時々このような平安と慰めの機会が必要だ」。

本書は『フィスク大学ガイド』や『ベストカレッジ 384』よりも正確に大学の真の姿を記述していると評判が高い。すでに廃刊になっているが、学部学生による初めての大学ガイドで、質が高いとして今でも言及されている。スチューデント・スキルに類する話題は見られない。

5.4 米国の大学ガイドの特徴

膨大な文字情報から自分に合った大学を選ぶことができる能力と強い学習意欲を持った学生が紹介した代表的な米国のガイドの主な読者と思われる。掲載大学数が全大学数の5%から15%の数の「お勧め大学」が選択されていることから上層及び上位中間層の読者を想定していると考えられる。

米国のガイドは大学の評判、大学の広報とは異なるキャンパスの様子雰囲気、授業の実際、学生生活の実態、課外活動やクラブ活動、あるいは様々な学生団体やコミュニティ（仲間集団）などについての学生による記述が中心である。日本の大学ガイドによく見られる高等教育の権威や教育学の研究者が書いた教育的理念的な記事は全く載っていない。

米国の大学ガイドの特徴は学生生活に関する情報がふんだんに提供されていることである。学生生活が充実し楽しく有意義に暮らせそうか、自分に合った仲間集団（コミュニティ）に参加できそうか、などを予想するのに役立つ。自分の趣味や好みに合わない大学に入学すると中退の危険性が高くなるから、学生生活情報は中退防止に役立つ。

米国のガイドの記述は学生の個人的意見で統計的データではないが大学の雰囲気を良く伝えている。日本のガイドは学問や研究や授業に関する紹介が多い。また、その大学の就職動向や将来のキャリアに関する実績が重要視されている。簡単に言えば日本の大学ガイドは、大学で勉強する学問の紹介、授業科目やカリキュラムの案内、卒業後のキャリアの紹介が特徴である。大学当局や研究者の視点で書かれている。

米国の大学ガイドは学生がその大学で充実した生活を送れるかどうか重要なテーマとなっており学生の視点で書かれている。米国の大学ガイドは成績が良く、自分に合った大学を選ぼうとする学生に役に立つガイドである。自己管理能力が弱いなどスチューデント・スキルが不足している学生を支援するような記事は掲載されていない。

6 サバイバルガイド

6.1 サバイバルガイドの目的

米国では「大学サバイバルガイド」(College Survival Guide)という案内書が出版されている。大学進学を目指す高校生や大学に入学した学生が大学生活を無事に生き抜くための対策やノウハウをまとめた書籍である。学生が直面する様々な課題とその対応策が示されている。サバイバルガイドは日本ではほとんど見かけないが中退対策としても有効に思われる。

書評や読者コメントを見るとサバイバルガイドは高校生や大学生が自ら購入したり、あるいは親が高校卒業時にプレゼントしたりしている。サバイバルガイドは大学の授業科目の教科書ではなく、それを使って大学当局や研究者が学生に教育指導するものでもない。

サバイバルガイドの内容は高校卒業の若者が有意義な大学生活を送るには適切至極なアドバイスで、「できて当たり前、当然知っているはずのこと」がほとんどである。中退の可能性が大きなハイリスク学生や準備不足学生は「オリエンテーションに出席する」、「授業に遅刻しない」、「宿題を期日に提出する」、「テキストやノートを授業に持参する」、などといった「当たり前」のことをしない。それらは大学の授業や研修で学生に教えることではないだろう。欠席者のいる授業で欠席者に欠席しないスキルを教えることはできない。レポートを提出しなかった学生に授業中に提出を促すよう指示すると本来の教育のための時間が少なくなってしまう。多人数授業で少数の私語や居眠りなど問題行動を個別に指導することは難しい。

サバイバルガイドはどれも小ぶりでページ数も200~300ページで薄い。文字だけのものもあるがイラストや図表入り、カラーを使用しているものもあり大学ガイドより読みやすい。当たりの事が書かれておりハイエンドのエリート学生を想定したものではない。

特定の読者向けのガイドも多数出版されている。たとえば敬虔なキリスト教徒、注意欠陥・多動性障害(ADHD)者と学習障害(LD)者、特定の人種・民族系の学生(たとえばフィリピン系、アフリカ系、ネイティブ・アメリカン、ヒスパニック系など)。

4年間の大学生活を生き延びるには大学1年目を乗り切るのが重要なので1年生向けのものも多い。女子は男子よりリスクが高いため女子向けのサバイバルガイドが多数出版されている。大学進学は子供への愛着の度合いが強い親にとってはとても辛いことである。大学進学者の子供のいる親のためのサバイバルガイドもある。

6.2 サバイバル・ガイドの例

サバイバルガイド『1年生が1年目の大学生活に成功~大学生活を始めるにあたって知っているべき21の事柄』(Kriegelstein 2016)の内容を紹介する。本書はサバイバルガイドという書名ではないが実質的にサバイバル・ガイドである。新しく一人暮らしを始める学生が実践しやすい内容がわかりやすく書かれている。B5判よりやや小さめのサイズで100ペー

ジ、紙装の薄い書籍である。見出しが太字でマンガのようなイラストのページが多い。計画、達成目標、解決したい課題、やってみたいアルバイトの職種名などについて読者が書き込むページが用意され、巻末に自由記述のメモページが10ページある。全体の文字の分量は少なく、個人が自分のスケジュールを管理するシステム手帳に似ている。

本書にある21の行動指針とアドバイスの幾つかを紹介する。「計画を立てよう：したいこと、しなければならないことの優先順位をつけよう。日曜日に1週間の計画を立てよう」、「バランスのとれた食事を楽しく食べ、健康維持のため歩数をカウントしよう」、「早起きしよう。そうすればその日は“勝ち”」、「お金は賢く使おう：衣服については場面に合った必要なものをそろえよう」、「お金を稼ごう」、「お金を貯めよう」、「ママから離れて自活するから、洗濯、買物、掃除、運動、実家に電話をする計画を立てよう」、「人の印象は7秒で決まるから出会いの最初の印象を大切にしよう」、「友達の輪を広げよう」、「受講している授業で友人を作ろう」、「授業では素行が悪そうな学生の隣に座らない」、「教室では前列、中央に座ろう」、「ノートは色ペンを使い記憶しやすくしよう」。

要約すると、新しい環境で自立自活し、自分の健康、お金の収支バランス、貯蓄、日課、目標などをしっかり把握し、友人知人の人間関係を上手に維持している、そのような学生になることを目指すのがサバイバルのコツだと主張している。特段に目新しいものは1つもないがアドバイスを全て実践できれば大学1年目で挫折することはないだろう。

サバイバルガイドではアカデミック・スキル（別名スタディ・スキルともいう）、つまり高校卒業までに学ぶ学科の学業成績や大学で良い成績を取るための勉強の方法や技術については述べられていない。授業に関しては積極的に授業に出席し、きちんと見やすいノートを取ると言う当たり前のことをするように勧めているだけである。

別の書籍、『何でも出ている大学サバイバルー大学生活から最大のものを得るためにあなたが知っておくべき全ての事柄』（Fitzgerald 2011）を見てみよう。第1章の大学の学費支援関係、各種奨学金、学生雇用制度などお金の話から始まる。第2章は入学前にしておくべき学費関係の手続き、健康保険、健康診断記録、障害学生の場合、大学からの連絡先情報、友人と家族、親族との交流についてなどの身辺整理。第3章は自分の経済状態の把握の仕方などである。家を離れて一人前になる準備について説明してある。第16章「科学的な学習術」で、授業への出席、ノートをとること、効果的な読書術、勉強グループ作り、教授に話しかけることなど、スタディ・スキルに関連する事柄に簡単に触れられている。

7 おわりに

米国の大学ガイドは学生がその大学で充実した学生生活が送れるかどうかを学生自身が判断するのに役立つ情報が紹介されている。他方、サバイバル・ガイドのコアはしっかりした自己管理術の実践の勧めである。学生の視点で大学という独特の世界を上手に生き抜く術が語られている。それに従えば、できて当たり前のスチューデント・スキルは自然に

身に着くし、学力の強化も合わせて行なえば、準備不足が原因で中退することはなくなるだろう。

米国ではスタディ・スキルは学生のacademic skills（勉学術）、スタディ・スキルは学生のlife skills（生活術）と呼ばれている。米国ではlife skillsはそれを教える授業科目も開設され多くの実践例があるが別の機会に論じたい。

日本では「学生のサバイバル」という考え方は学問研究の分野でも教育実践の分野でも知られていないようだ。大学教育学会、高等教育学会など主要な高等教育研究を目的とする学会の研究発表や実践報告、あるいは学会誌で取り上げられた例は見当たらない。

日本の大学の中退率は世界的には低いけれど、高校卒業生で大学に進学した学生の中には中退しないまでも大学という新しい世界に十分に適応できず、必ずしも満足のいく学生生活を送れないでいる者は少なくないのではないだろうか。米国の大学中退率は高いけれど、それを個人の問題として扱い、学生が自分で対処するためのサバイバル・ガイドがある。日本の現状に合ったサバイバルガイドがあれば、そして学生が大学進学のリスクを認識し自らの力で対応するようになれば、日本の中退事情が変わるだけでなく大学が学生にとっていっそう有意義な体験の場になるのではないだろうか。

謝辞

本稿は科学研究費（課題番号 23K02558）の補助を受けた研究の成果である。

参考文献

（インターネットの情報は2024年4月30日に取得したものである。）

- [1] 朝日新聞社(1994)『大学ランキング'94』、朝日新聞社
- [2] 一ノ瀬大(2021)「中退者調査から見えてきた中退未然防止策の可能性」、大学行政管理学会誌、25、pp.92-103
- [3] 宇田川拓雄(2021)「学生の科目合否における学生属性の影響に関する研究」、嘉悦大学研究論集、63(2)、pp.63-77
- [4] 学校基本調査(2022)、<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&query=進学率>
- [5] 学校基本調査(2023)「年次統計 2023年度」、https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=dataset&toukei=00400001&tstat=000001011528&stat_infid=000031852309
- [6] 厚生労働省(2009)「国民生活基礎調査の概況」
- [7] 杉谷祐美子(2008)「初年次教育「第2ステージ」へー実践と結びついた研究への期待ー」、日本私立大学協会、アルカディア学報、No.329、<https://www.shidaikyo.or.jp/riihe/research/329.html>
- [8] 日本私立大学振興・共済財団(2023)、「令和5(2023)年度 私立大学・短期大学等 入学志願動向」、<https://www.shigaku.go.jp/files/shigandoukouR5.pdf>
- [9] 山本繁(2022)「大学中退予防最前線」、大学コンソーシアム京都 2022年度SD共同研修プログラム、2022年12月15日、プレゼン資料<https://henews.consortium.or.jp/wp-content/uploads/2022/12/9e87559cabc40b6dc5d3e931f73f0123.pdf>
- [10] 読売新聞社(2019)『大学の実力2019』、中央公論社
- [11] Fiske, E., ed (2019), *Fiske Guide to Colleges*, Source Books
- [12] Fitzgerald, S. (2011), *The Everything College Survival Book: All You Need to Get the Most out of College Life*, Adams Media

- [13] Franek, R., David Soto, Stephan Koch, and Pia Aliperti (2019), *The Best 384 College*, Penguin Random House
- [14] Goldman, J., and Colleen Buyers ed. (2019), *The Students' Guide to Colleges: The Definitive Guide to America's Top 100 Schools*, Penguin Books
- [15] Krieglstein, T., Melissa Ruiz MSW, Sabina Colleran (2016), *First Year Student to First Year Success: 27 Things You NEED to Know When Starting College*, Swift Kick

(2024年4月30日受付、2024年7月2日再受付)